

最優秀賞

「祖父の手」

愛知県立豊橋工業高等学校 建築科 3年
山本芽依

私の祖父は、無口で、厳しく、時に優しく、家族を大きな愛情で包み込む、偉大な人だった。

そんな祖父は七年前に倒れた。病室に向かうと、強かった祖父が弱々しく天井を見つめていて、私は思わず、祖父の左手を力強く握った。骨張っていて、ゴツゴツした手の甲。所々に硬くなったタコがある、大きな手の平。その左手の小指は、第二関節から上が無いということに初めて気が付いた。

注文家具職人だった祖父。小指の怪我は、若い頃、仕事中に負ったそうだ。

小指が無いとどんな感じなのか。気になった私は、試しに小指無しでペンを握ってみた。

すると、思うように強く握れず、力を上手く入れることが出来なかった。

「職人は手が命」と聞いたことがある。

その一部を失ってしまった祖父が、どんな事をしてきたのか気になり、祖母に聞いた。

祖父は、同じ職場の人から妬まれる程の知識と技術があったそうだ。それを活かして、学校の下駄箱、店のカウンターや戸棚など、沢山の物を作り上げ、沢山の人の笑顔にしてきた。私もその一人である。

小学校入学前のある日、祖父が自慢げに勉強机を持って来たことがあった。当時、祖父が家具職人という事までは理解していなかったが、私のために作ってくれた事が嬉しくて、用が無いのに勉強机の所に行き、触れたり、眺めていたのを覚えている。

小学生になると、友達と家で遊ぶことが多くなる。友達の家に行く度に市販の勉強机を目にするが、羨ましいと思ったことは一度もない。私にとって、世界に一つだけの勉強机が自慢だからだ。

祖父が注文家具職人と知ってから、今までとは違う視点で勉強机を見てみた。すると、角が全て削られていて、ネジの頭が見えにくく作られていた。物を使う人の事を考えた、祖父の工夫と優しさが勉強机に込められていたのだ。

その時、祖父との思い出が走馬灯のように頭の中を駆け巡り、祖父の大きな手が思い浮かんだ。

作った人が亡くなっても、その人の作った物が形として残る。そして、物を見る度に作った人の事を

思い出すことが出来る。その素晴らしさに心を動かされ、ものづくりに興味を持ち始めた。

中学生の時に技術の授業で、生活に役立つ物を木材で作る課題があり、私は、本を沢山買う妹のために、少し小さな本棚を作ろうと思った。

祖父の作ってくれた勉強机を真似して、角を削ってみたり、釘が見えないようにシールを貼ったり、上に物を置けるようにしてみたり、使う人の事を考えながら作業を進めた。

授業を重ねていく内に、鋸(のこぎり)や鉋(かんな)の使い方に慣れ、手にマメが出来始めた。少し、祖父の手に近づいた気がして嬉しくなったのを覚えている。

完成した本棚を持ち帰り、直ぐに妹に見せた。祖父が勉強机を持って来た時の私のように妹は喜んだ。その瞬間に、達成感を感じ、物を作る楽しさを実感した。

祖父は、沢山このような体験をして、沢山の人の喜ぶ顔を見てきたのだろう。

手作りだからこそ感じる、達成感。手作りだからこそ形として残る、自分の知識と技術。祖父が小指を失っても職人の道を歩き続けた理由は、ここにあったのかもしれない。

今の時代、少子高齢化に伴う労働人口の減少により、様々な業界で人手不足が問題とされている。その深刻な問題を解決する手段の一つとして、ロボットの活用、ロボット化の動きが強まっている。

もちろん既製品にも、いいところは沢山ある。手作りに比べて値段がリーズナブルであり、手軽に購入でき、直ぐ手に入れることが出来る。

だが、手作りでしか出せない特別感、手作りでしか出せない温かみ、人の手で作り上げる大切さを忘れてはいけない。

建設業界の問題としては、知識と技術を持った人の減少、高齢化が進んでいることだと私は思う。若手人材を増やすためには、私が祖父に作ってもらった勉強机、のような、ものづくりに興味を持つ、一つのきっかけを作ることが重要ではないだろうか。

祖父からきっかけをもらった私は、この男社会がまだまだ残る建設業で、祖父の大きな手のように、沢山の人の笑顔にしていきたい。